

豊田浩志著

『キリスト教の興隆とローマ帝国』

新田 一郎

キリスト教が政治的・宗教的勢力として侮り難い力を保持し、人々の注目を引き始めるのは三世紀になってからである。この頃になると教会は属州の上層・知識人の中にも改宗者を見出し、またキリスト教徒であることが帝国官吏としての昇進を妨げる事はなくなっていたようである。そして三世紀末になると宮廷人として、また属州の高官として活躍した著名なキリスト教徒さえ登場するのである。このような状況下にあつて、皇帝は自らの権力保持のためには対キリスト教政策を疎かにすることは出来ない。そのさい或る皇帝は権力の強化のためにキリスト教徒を弾圧した。しかし或る皇帝は逆に帝国の円滑な統治のためキリスト教徒に好意を示し、かれらの支持を期待した。マキシミヌス・トラクス、デキウス、ウァレリアヌスらは前者の立場を、そしてセウエルス・アレクサンダー、フィリップス・アラブスらは後者の立場に立った。三世紀以降にあつては國家と教会との間のギャップは狭められていた、と言つて良いであろう。壮大な教会が各地に建設され、属州における都市の上下關係が同時に司教間のヒエラルヒーを規定していった。教会政治家といわれる司教も登場し、正統・異端の論争も起りつつあつた。キリスト教はなお未公認ながら、

今や平和のうちに帝国民に浸透し、一大勢力となることも夢ではなかつた。むろんかかる流れに抗し終末論的・黙示的立場に立つラディカルな運動があつたことは事実である。しかしそれは少数派の運動であり、教会指導者らにはかかる運動に対し警戒的であつた。これが三世紀から「大迫害」勃発前のローマ帝国と教会との關係であつた。

此の度出版された豊田浩志氏の労作『キリスト教の興隆とローマ帝国』は、この三世紀におけるキリスト教の上層身分への浸透の实情を詳細に論じて通説を補強すると共に、更に積極的に新たな解釈を提起している。この内、元老院・騎士身分へのキリスト教の浸透を扱つた第一章「帝国支配身分とキリスト教」と第二章「紀元三、四世紀におけるキリスト教と帝国支配身分」の部分は通説の確認と補強に留まつているが、キリスト教の上層身分への浸透を権力の頂点に立つ皇帝にまで溯らせた第三章「キリスト教皇帝フィリップス・アラブス」の部分は迫力がある。豊田氏に依れば最初のキリスト教皇帝はコンスタンティヌスではなくフィリップスであつた。またガリエヌスのキリスト教寛容政策の意義を強調し、事実上キリスト教が公認されていた事に言及した第五章「皇帝ガッリエヌスとキリスト教公認勅答令」の叙述も特筆すべきであろう。この三章・五章の部分はいずれも通説の域を越える新しい解釈と言ふべきである。(この部分については後述す)。

しかし本書の庄巻は、そこに割かれた頁数の少なさにも拘らず序章「『大迫害』直前のローマ帝国とキリスト教」とそれに直接つながる終章「キリスト教ローマ帝国への道」であろう。この二つの章は「大迫害」勃発の原因の考察にあてられているが、この

部分の考察が極めてユニーク、斬新であることを知るため、先ず「大迫害」勃発の原因に関する通説を紹介する必要がある。

従来の研究に依れば突然の「大迫害」の決定には多くの謎がある、としながらも、(1) 全人のポジティブな協力なしには達成しえぬ国家再建という難事業にさいしてキリスト教徒が採ったネガティブな態度（それは少数ながら軍役の拒否を表明したキリスト教徒兵士に端的に現われている）、(2) 国家の再建にとって不可欠と考えられた全人の宗教的・思想的一致をめざすテトラルキア時代の皇帝の復古政策とこれに対する教会側の抵抗、そして(3) 熱心な異教徒であったガレリウスの影響等が挙げられる。

しかし豊田氏はエウセビウスの『教会史』七卷一章七—八の記述に依拠しつつ、大迫害の原因を教会内の分裂、激しい党派争いに求める。そしてエウセビウスが言及しなかったこの教会内の激しい党派争いを、既にキリスト教に接触していたと考えられるコンスタンティヌスを擁立しつつ、一挙に権力側に立とうとする有力聖職者・信徒の政治運動との関りで理解しようとする。三世紀以降急速な発展をとげ、既にキリスト教徒皇帝（フィリップス）をも持つに至った教会勢力は今や自らの力でキリスト教に好意的と考えられたコンスタンティヌスを擁立し、宮廷革命とも言える運動を起すまでの勢力となった。しかし「この教会側の仕掛けは事前に見破られ」（二四二頁）「機先を制した当局によって一網打尽にされた」（二八頁）。「大迫害」はこのような経緯の下で生じたのである。豊田氏はこのように主張する。

「大迫害」の原因をめぐるこのような豊田氏の見解がいかにユニークかつ特異であるかは明白であろう。それは長年にわたる欧

米史家の共通理解の枠を遙かに越えており、その点で大胆な解釈といつてよいであろう。事実、豊田氏はこの事を強く意識している（三頁）。

それではかかる解釈は果して正鵠を得ているのであろうか。豊田氏のこの新しい解釈のうち迫害の責任をもつばらキリスト教側に求める部分は、無論エウセビウスの記述に依拠している。エウセビウスによると、教会の内輪争い・党派争いが行きつく所までいくや、神は遂に控え目ながらこれに干渉し、かくして先ず迫害が軍隊に及んだとしている（八卷一章七）。しかし教会の内部に迫害の責任を求めるこの記述はラクタンティウスらの著作はもとより、『教会史』の中でもこの大迫害の時点でのみ見出される特異なものである事を考えると、やはり異常であり、吟味の対象とされねばならないであろう。豊田氏もこの部分の描写の特異性を確認している（二二—二三頁）。

一方、キリスト教徒の内紛・党派争いを宮廷革命ともいうべきコンスタンティヌス擁立と結びつけようとする考察（終章）はエウセビウスが全く沈黙していることから見て一層大きな問題点を残していると言える。この部分の豊田氏の論述が、エウセビウスの沈黙の中に逆にその積極的根拠を探ろうとするものである事に注目されねばならない（二七—二八頁）。豊田氏に依ればエウセビウスはコンスタンティヌス擁立運動があったことは知っていた。しかしかかる運動を推進した一部教会指導者の権力志向的行動を強く非難しつつ、この事件には一貫して沈黙を守ったのである（二四—二四三頁）。

以下これらの点につき私なりに問題点を提示し併せて私見を述

べていきたい。先ず始めに指摘したいのは、教会内の内紛・分裂・党派争いが迫害の誘因となったという『教会史』八巻一章七―八の記述が一連の具体的な出来事の要約とは考えられないという事である。迫害が教会側の内紛に責任があるとする発想自体、不可解であろう。教会の内紛は異教徒皇帝にとって望ましい事であり、むしろなすに任せ、教会自体の弱体化を望むのがベターであろう。しかも考えられる不和とは正統・異端論争、或いは背教者の教会復帰をめぐる論争であるからには、なお更の事である。後の背教者ユリアヌス帝のキリスト教政策は正にこのようなものであった。教会内の党派争いはどう見ても迫害とはつながらないのである。この間の事情は同じ『教会史』の中の記述からも確認しうる。例えば(1)『教会史』八巻一三章九―一〇には八巻一章七―八の部分の繰り返しの記述があるが、そこでは大迫害の誘因としての教会内の争いについての言及は全くない。「突然かれらは私たちへの平和を捨て、敵対行動に出た」というのが叙述の全てである。(2)八巻の補遺部分(AER)の記述には迫害の首謀者はガレリウスであり、彼が大迫害勃発前から軍隊と宮廷からキリスト教徒を一掃しようとしていた事への言及がある。これは迫害が皇帝側から一方的になされたことを示す証拠となる。八巻一章七に見える教会内の分裂・不和の結果、先ず軍隊内に迫害が及んだという不可解な記述(豊田氏もこの記述に苦慮する―二三頁)はこの補遺部分の記述で解決する筈である。一章七の部分に因果関係を求める事は始めから無理なのである。大迫害に先立ち、先ず軍隊内で迫害が始まった事をエウセビウスは知っており、それをこの部分に記しただけのことと考えられる。(3)、八巻一六章二

に見える迫害の張本人ガレリウスが神の復讐に合い、不治の病にかかったという記述にも注目すべきである。迫害は就中ガレリウスの仕業であった(ラクタンティウスも同じ立場である)。この記述はガレリウスが神の咎ではないこと、つまり迫害を教会の責任にすることは無理であることを示すものとして受けとめ得るであろう。

では問題の八巻一章七―八の記述はどう解釈すべきなのか。豊田氏はこの党派争いを一部教会指導者達によるコンスタンティウス擁立運動とのつながりでとらえ、「大迫害」の発生の原因を追求した。このアプローチはそれ自体としては整合性を持つ。内紛が政治運動と関連するのであればローマ側も容赦はしないからである。我々はここでこの『教会史』第八巻が既に国家と教会が和解し、教会が苦難体験から解放された時期に書かれたことに留意しなければならない(『教会史』の一卷から八巻まではガレリウスの寛容令布告の直後叙述されている)。教会は今や苦難の時代を終え新しき出発することになった。迫害・苦難の時代にとどめられねばならぬ。一体、大迫害は教会にとって何であったのか。エウセビウスは『教会史』第八巻の問題の箇所とそれに続く部分でこの問いに答えた。教会が享受した平和は信徒を傲慢にし、やがて党派争いというキリスト教徒にとって望ましくない背信行為が生じた。これが神の怒りを呼び、かくして刑罰として大迫害がもたらされた。しかし迫害に結果する苦難は神の刑罰であると同時に神の課した試練でもあり、神は殉教者の行為もあり、かかる背信行為をも赦し、かくして教会の再生は完成した。……

これがエウセビウスの大迫害観であったと考えられる。第八巻の大部分が殉教者の記述にあてられていることにも留意すべきである。この解釈は『教会史』第十巻の叙述が支えてくれる。エウセビウスはここで教会内の争いという悪き行為を、良き業を憎むダイモーンの仕業とする（十巻四章一四）。そして教会が大迫害により体験した苦難は教会がダイモーンの嫉妬からその畏にはまり、神から離れたことが原因である（十巻四章五七―五八）。しかしそれにも拘らず神はかかる教会にも赦しを与え（十巻四章一二）、その結果、教会の再生が可能となった（十巻四章五九）―彼はこう結論づけている。

大迫害の責任を教会内部に求めようとしたエウセビウスの解釈はかくして信仰上の立場に立つ宗教的・内面的側面からの叙述であったと見なすことが可能となろう。それは罪を自らの内に求め、苦難を背信に対する刑罪かつ試練として受けとめる伝統的・ヘブライ的理想の発想というべきものである。そこにあつては従つて内紛・党派争いの性格は副次的な問題となつてしまふ。彼が争いの内容に全く言及しなかつたのは当然であらう。従つて教会内の党派争いをコンスタンティヌス擁立運動との関連で解釈しようとする豊田氏の立場には否定的にならざるをえない。

次に前述の豊田氏の解釈がそれ自体としても無理ではないかということを個々の具体例から述べてみたい。(1)先ず指摘したいのは、エウセビウス自身、『教会史』のどの部分にもこの件につき一言も触れていないという事である。これに対し豊田氏は「沈黙」の中にコンスタンティヌス擁立を意図した権力欲旺盛な聖職者集団の存在を確認しようとするのであり、この点大きな問題を

残している。(2)、教会側がコンスタンティヌスを自らの陣営に引き寄せプロバガンダに力を入れていくのは三十二年十月の対マクセンティウス戦勝利の後である。「軍隊により選出される前に諸王の王である神御自身によつて皇帝に宣言された」（八巻一三・一四）という追加部分はこの事を示している。豊田氏はこの追加部分の中に「大迫害」直前の時期に既にコンスタンティヌスがキリスト教に接近していた事実、そして彼を皇帝に擁立する運動があつた可能性を認めようとするのである（二四〇―四三頁）。

(3)、『教会史』八巻一章七―八にあるキリスト教徒内の対立する党派を革新的ラディカル派と穏健派に区分することは一応可能であらう。しかしその場合、ディオクレティアヌス帝の信任の厚い有能で誠実な宮廷人ドロテオスはその前歴からいつて宮廷革命的運動には無縁の人であつたと考えられる。従つてコンスタンティヌス擁立の動きがあつたと仮定すれば、その担い手は革新的ラディカル派ということにならう。しかしかかる集団に属する筈の宮廷人への言及は皆無である。(4)、八巻一章七―八の党派争いはそれが現実としても所詮「言葉という槍による争い」であつたとすれば、それは父なる神・子なる神キリストの位格をめぐる論議ないしその他の教義上の論争といった神学的・信仰的立場のものであり、政治的性格をもつ運動とは考えにくいであらう。もっとも前述の如く第八巻の問題の箇所は神の側に視座をおく発想であり、その意味では党派争いの内容は二次的意義しか持たない事に改めて言及しておきたい。

以上、大迫害の原因をめぐる序章・終章で展開された豊田氏の見解のユニークさに引かれる形でかなりの頁を割き失礼を顧みず

氏の主張に対し問題点、疑問点を指摘した。私のこの批判は無論私の『教会史』解釈を前提としており、その点限界があることは言うまでもない事である。この点に関する再批判を望みたい。

次に第三章、「キリスト教皇帝フィリップス・アラブス」に移りたい。周知の如くエウセビウスはその『教会史』六卷三四章一で皇帝フィリップスがキリスト教徒であったことに触れている。

ただ「言い伝えによれば」という但し書きがあるため従来の説では、彼がキリスト教徒に対し寛容であったことは了承するが信者説までには至っていない。近年J・ヨーク或いはM・ソルディエラが漸く信者説を主張したというのが実情である。(一方ではH・ポールサンダーらの信者説否定論もある)。豊田氏はここでヨーク氏の研究をも援用しつつこの問題に言及し、非信者説の根拠がキリスト教皇帝の定義づけのさい採用された厳格さに由来していることを具体的に述べ、結局エウセビウスらの史料に散見する信者説を積極的に否定する客観的根拠がないことに触れる。そして典型的な異教的祭儀であるため信者説を否定する有力な論拠となっているローマ建國千年祭にしても、それは軍人皇帝フィリップスの自己顕示の絶好の手段として利用されていること、そしてこの千年祭が宗教儀式よりも祝賀行事にウェイトがおかれていたこと等を挙げ、彼の信者説を支持する。三世紀以降におけるキリスト教の全般的興隆、特に上層身分への浸透を考えると、このフィリップス信者説は肯定されて良いであろう。当時キリスト教徒の勢力はそこまで拡大していたのであり、皇帝は彼らの存在を無視することが出来なくなっていた状況にも注目すべきであろう。ただ氏が述べる権力欲が旺盛であり権力の保持のためには何でもし

かねないという政治家としての軍人皇帝フィリップスのとらえ方には若干抵抗を感じる。当時キリスト教の世俗化も進展していたであろう。しかしキリスト教は依然として未公認であり不安定であったことを考えればなお更のことである。

次に第五章「皇帝ガッリエヌスとキリスト教公認勅答令」に移りたい。三世紀中葉以降におけるキリスト教の急速な展開の背景にガッリエヌスのキリスト教徒寛容政策があったことは周知の事実である。彼の寛容令のあと教会は約四十年にわたる相対的平和の時期を迎えるのである。第五章はこのガッリエヌスの寛容令の持つ内容と意義について論じ積極的な評価を与えようとするものである。豊田氏によればガッリエヌスによるヴァレリアヌスの迫害令の撤回は単なる迫害中止令ではなくそれを越えた公認の指令であった。それは布告の中に没収財産の返還の指令があったこと、及びこの布告が単なる告示ではなく勅答令であったことから明白であるとす。氏のこの考察はとくに三世紀中葉以降におけるキリスト教徒の教的拡大そして上層への浸透から考えて穩当であり説得力のある論考といえよう。しかしキリスト教の地位がなお流動的であり不安定であったことはパレスティナのカエサレイアで生じた軍人マリノスの殉教からみても明らかである。『教会史』七卷一五章)。この点で豊田氏のガッリエヌス評価はやや好意的すぎる感がする。

順不同となったが、最後に第四章「皇帝ウァレリアヌスとキリスト教迫害」の部分に触れたい。この部分は皇帝ウァレリアヌスのキリスト教迫害の動機・原因をエウセビウスの『教会史』七卷十章二一九に見えるディオニシオスのヘルマモン宛の書簡の内容

分析を介して把握しようとするものである。特に興味深いのは豊田氏がここで迫害の動機として記されている宮廷異教神官とキリスト教徒宮廷人との対立を、宮廷の祭司団を構成する異教ト占官とキリスト教祓魔師集団との対立と判定している点である。宮廷で活躍するト占官としてのキリスト教徒宮廷人の登場は三世紀以降におけるキリスト教の上層知識人への浸透という状況下で始めて生じたものであろう。この点で第四章は極めて興味深い考察といつて良い。

以上で不完全ながら豊田氏の労作の紹介と批判を終らせていただく。終つての反省であるが、本来なれば序章と終章ではなく本論である一章から五章にもっと多くの頁を割くべきであつたであらう。しかし序章と終章の部分はそこに割かれた頁数とは逆に内容的に極めて重要な問題提起がなされており、それに引きずられる形でこの部分を中心に書評をまとめることになつた。またそのさい、失礼を顧みず私なりに問題点を指摘させていただいた。しかしそれは豊田氏の問題提起の大きさに由来するものであり、氏の労作の価値を低めるものでない事は当然である。氏が学界に投げかけた波紋は極めて大きい。今後当分の間、この問題をめぐつてさまざまな議論が展開されることは間違いないであらう。

最後に更に一言、付け加えをさせていたがたい。それは繰り返すことになるが、三世紀以後におけるキリスト教の急速な興隆、と

くに上流貴族層への浸透の实情をさまざまな角度から示すことと意図した著者の目的はかなりの程度で充たされているという事である。そしてそれは終章の末尾に見える「われわれはさかしらな護教的弁説に終始するよりも、勇氣をもって愚直に事実をみつめ続けるべきではなからうか」(二四六頁) というアプローチの成果といつて良いであらう。ただ権力の中核に近い地位にある上層のキリスト教徒が考察の対象になっている事にもよると思われるが、信念と克己心に乏しく権力欲旺盛な醜い人間の側面の発掘に走り過ぎてしまつていふ感じが否めない。これでは下層の名もない平信徒までが一律そうであつたかのような印象を与えてしまふであらう。キリスト教徒の運動には弱い醜い側面が多く看取される。しかし神はそれをも赦すであらう、という大乗的・寛容的立場に立つことは一つの見識であつても全てをカヴァー出来るものではない。護教的といふことではなく、古代キリスト教徒の動向の中に見られる賞讃に値いし、人々の感動を呼ぶ側面に光をあて、これを抽出するアプローチも同時に必要であらう。少数の義人の存在なしには神の赦しも期待しえないというのが歴史の教訓といふべきであらう。そしてこの義人の条件は全ての人々に平等に開かれている事を述べ擲筆する。

(A5版 二四六頁一二頁 一九九四年二月 南窓社 八〇〇〇円)

(金沢大学文学部教授)